

見本 試読 SAMPLE

あんぷらぐど
荒縄工房

M妻 佳乃の 崩壊

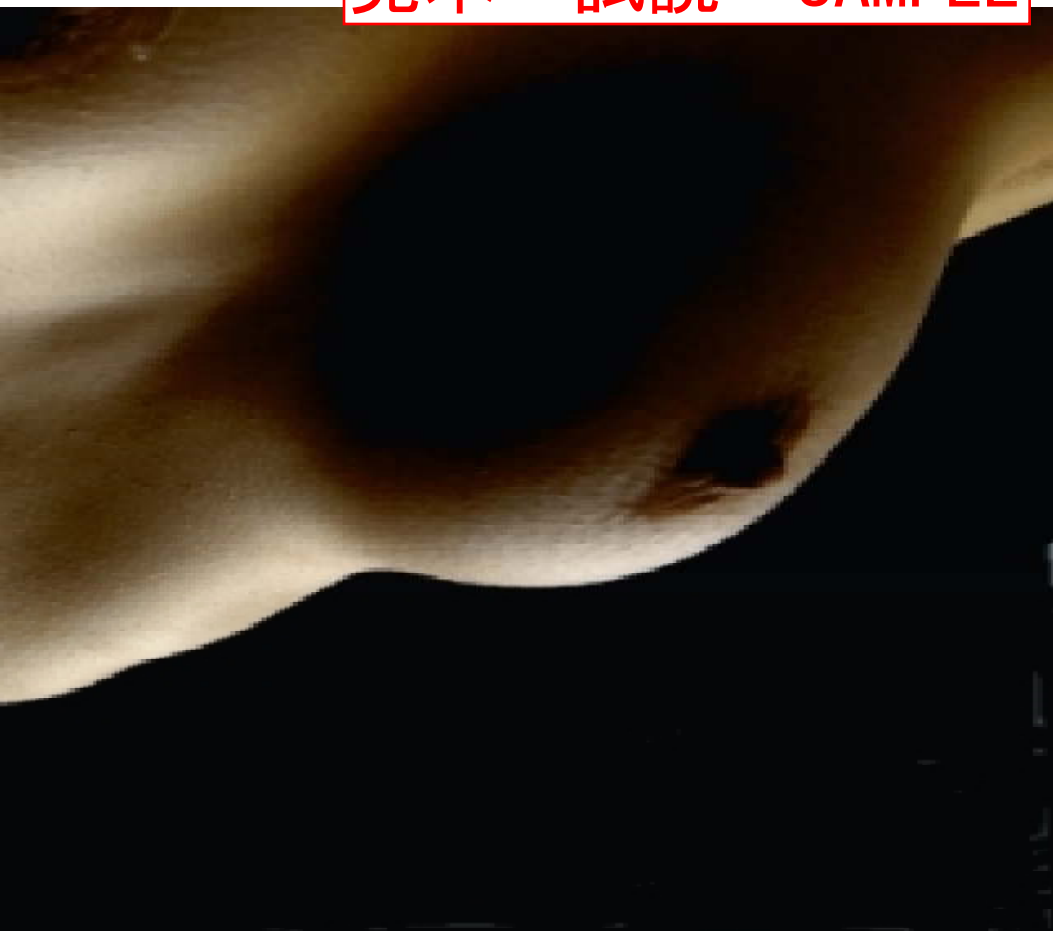
見知らぬ男の誘いを受け、
暴力と残虐の世界に
踏み込んでいく。

見本 試読 SAMPLE

見本 試読 SAMPLE

S
M
小説

M妻 佳乃の崩壊



あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



見本 試読 SAMPLE

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

めんぷらぐど

SM雑誌に「仲ゆうじ」名でSM小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにやふに」「あんぷらぐど」名でSM小説を執筆。独自の自虐的SM、一人称による告白形式の作品、伝奇SM小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

見られた	7
雨水	13
全裸散歩	28
便器修業	44
下等な生き物	60
水責め	67
生贄として	78
無料のグッズ	93
巨大な女たち	111
サンドバッグ	123
懇願	144

見本 試読 SAMPLE

下水 154

普通じゃない道具 165

ブラシ 173

血の涙 181

回転遊具 199

強力な器具 211

電撃の恐怖 231

繁華街にて 252

温泉小屋 271

地獄旅館 283

底なし 293

腐敗する心 298

見本 試読 SAMPLE

壊れた悦楽人形 305

子宮打ち 314

自虐散歩 334

記念撮影 346

拷問部屋 353

診察遊び 369

皮剥き 380

両親との食事 39

木馬責め 407

木彫の像 430

鞭の残像 451

ポリマー浣腸 463

見本 試読 SAMPLE

奥付	6	1	2	完全崩壊	5	9	6	崩壊への一歩	5	6	0	新たな責め手たち	5	金魚鉢	4	9	7	錆びた針	4	8	8	残酷吊り	4	7	5
----	---	---	---	------	---	---	---	--------	---	---	---	----------	---	-----	---	---	---	------	---	---	---	------	---	---	---

見本	試読	SAMPLE
----	----	--------

8

見られた

その男は私の隣人だった。

さんと言うには、ちよつと若すぎますね」

らりと白い歯を見せて、彼は挨拶した。

は事情を教えたわけではなかった。別居状態にあ

空き屋だった実家に戻ってきたことなど、他人に

言
べきではない。

せていただきましたよ、ゆうべ」

ニミ置き場の前で、男はそう言った。

ゆうべ？ なにを見たというのか。

「録画しておきました。いやあ、なかなか、あれだけ

の美しい姿はお目にかかれませんか。とても手入れが
いいですね」

「なんのことでしょう？」

「リビングルームでオナニーしていたでしょう」
後頭部を殴られたような衝撃。このまま気絶するの
ではないかと思った。

男をじつと見ないわけにはいかない。

四十、いや五十以上か。髪は濃いものの、頬の深い
皺や、顔に表れているシミは年齢を感じさせる。

歯は白く異様に大きい。痩せて、死神を連想させる
異臭までも漂わせている。

ご近所の奥さんが「おはようございます」と言いな

がら、大きなゴミ袋を持ってやってきた。

男は軽く手をあげて、さっそうとどこかへ出かけていった。後ろ姿は近所に住むサラリーマンだ。

見られたというのか。私の昨夜のあの行為を。

でも、どうやって。

いずれにせよ、犯罪行為に違いない。隣人を覗くということは。

警察に通報しよう。

だが……。

私のしていた行為を、誰かに説明するわけにはいかない。

「奥さんはなにをしていたんですか、そのとき」

警官に厳しく問い詰められたら、なんと答えればいいのだろう。

私は別居してから、ネット通販で入手した大人のオモチャに夢中になっていた。

昨夜は太くて黒いデイルドを床に置き、全裸になって腰を沈めていたのだ。誰かに強制されている妄想を抱きながら。

「奥さん、根本まで、しつかり入れるんだ。もし、それで五分以内に二回、イクことができなかったら、大好きな浣腸をたっぷりしてやろう」

そして私は、一度もイクことができなかった。

「そこまで浣腸好きとはね。亭主に仕込まれたのか

な？」

「そんな……」

元夫になりつつある、夫の顔がちらりとよぎる。

こんなシチュエーションを思い描きながら、ぬるま湯の浣腸を自らしていたのである。

「ああ、恥ずかしい。こんな体になってしまって……」

バルーン式の浣腸器を、一人で操作しながら感じていた。

「そうだ、奥さん。たっぷりお腹に入れるんだ。全部入れてしまうんだ」

「苦しい、ムリです。許して」

「許すわけにはいかないんだよ。ほら、さっさと入れてしまえ……」

あげくに、その洗面器に排泄までしていたのだ。感じまくって激しくデイルドを再び使いながら……。

その一部始終をあの男に見られたとしたら……。

もう、ここに住むことはできない。だからといって、すぐに引越すわけにもいかない。

冷たい雨が降っていた。冬の到来を告げている。

深夜の裏庭。

私は全裸にされて逆さに吊られていた。頭に血がのほり、ぼんやりとしてくる。

私は隣人の説得に従うしかなかった。

「あなたにはM性がある。だから、こうして巡り会った。どうです。徹底して、そのM性を開発してみませんか」

脅しもせず、謝りもしない。かわりに、彼が私に会わせたのは、むさくるしい小太りの中年男だった。

「こいつに、あなたの映像を見せました。この男は二十四時間、あなたのような女をいじめ、辱め、苦しめることだけを考えています。あなたを開発するための、いわば技術者だ。私と彼なら、徹底的にM性を引き出してさしあげますよ」

私はその醜い男を「技師」と呼ぶことにした。

奇妙な関係だった。

私は彼を犯罪者として告発しようとしていたのに、なぜか、その夜、彼と近くの喫茶店で話し合いをすることになり、そこで恐ろしい内容の「誓約書」を提示された。

人間性を剥ぎ取り、私は陵辱の対象としてののみ、呼

吸し生命を維持することが保証されている。ただし、唯一の救いは、期限が明確になっていたことだ。

「二週間です。その時点で次のことは考えましょう。お互いにね」

私はバカだと思う。二週間なら……。

夫を愛していないわけではない。夫との別離は偽装で、夫が多大な借財を返済できず自己破産することになり、離婚を前提とした別居に踏み切ったのである。

「頼む、しばらく別々に生活しよう。ほとぼりが冷めたらまた一緒になることもできるんだから」

当面の生活ができるぐらいのお金はあるものの、私名義の財産はそれほど多くはない。

いずれまた一緒に暮らせるなら、夫が稼いでくれるようになるなら、協力するしかないだろう。

「表向きには離婚したことにしてある。しばらくは外で会うこともできない。寂しいだろうが、がまんしてくれ」

実母が十年ほど前に亡くなってから、空き屋のまま放置されていた実家に戻った。

久しぶりに訪れた二階建ての日本家屋は、かなり傷んでいたが、しばらくなら住むこともできそうだった。派手なリフォームもしたくなかった。

夫の件がいい方向へ進み、再び一緒に住めるようになったからリフォームするなり、売却すればいいと考

えていた。

周囲は子どもの頃の思い出とは一変し、マンション、アパートばかりになっていた。私を知る者はほとんどいなかった。買ってもらったばかりの自転車でよく遊んだ近くの幹線道路は、驚くほど通行量が多くなつてしまい、一戸建てで暮らすような環境ではない。

畳の張り替え、水周りなど最小限の手入れをし、ここに暮らすようになってもう二カ月である。

それにしても、退屈だった。
体をもてあます。

だから、あんなオモチャを購入したのだ。軽いSMプレイなら夫としたこともあった。私も彼も、あまり

タブーのない人間だった。

楽しい夫婦の生活。そのちよつとした恥ずかしい愉
悦を、私たちは共通の思い出にしていた。

二週間の契約は、退屈を逃れ、その思い出にふさわ
しいスリルと恥ずかしさをもたらしにくれるかもしれない。
ない。

浅はかにも、そう感じていた。

「費用は？」

私の質問に、男と技師は困ったような表情をした。

「どういふことです？」

「私、お金をあなたがたにお支払いするんでしょう
か？」

「そんなもの」

男は吐き捨てるように言った。

「私たちが欲しいのは、あなたの体です。ほかにはいいりません。もつとも、あなたが応分の費用を負担したというのなら、拒絶はしませんけどね。金銭目的ではありません」

男の素姓はよくわからない。ただ、隣はかなり高級なマンションになっており、賃貸物件ではないと聞いている。身元のしつかりした者でなければ入居できないらしく、大使館や企業が借り上げて、外国から赴任してきた役員に住まわせていると聞く。

「こちらのこともお伝えしておきましょう」

男は一流企業の役員の名刺を出した。

「確かめていただいてかまいませんよ」

「わかりました」

私は安堵し、電話して確認することもなく、信じることにした。

「二週間、お願いいたします」

こうして十二月のある日。二人の奴隷にされた。それは私の想像を遥かに超えた恐ろしい判断だった。人間の姿をした女をどろどろに溶かして、得体の知れないなにかに変えてしまうような選択だったのだ。

冷たい雨に濡れながら、逆さに吊されている私。

足をほぼ直角に開かれ、秘部を、隣のマンションか

らの灯りに照らされている。

まさか、それが人間だとは誰も思わないだろう。

傘をさした男と技師が、見下ろしている。彼らが見ているのはいやらしい二つの穴だ。

「寒いでしょう。あなたを極限までいたぶるには、冬はいい季節です」

男の指は、遠慮なく私の膣にねじ込まれる。

「温かいですね。おまけに濡れている。さて、これからどうするんだね」

「初日ですからね。なんといっても最初はこれです」
技師は、私が使っていたバルーン式の浣腸器を見せた。その先端を膣の入り口あたりでこねくりまわして、

淫らな汁をなすりつけた。

固い先端がエイナスに当たる。

「あなたのやり方より、チューブをもっと奥まで入れた方がいい」

そう言いながら、技師は恐ろしいほどの力で、奥へと入れていく。

浣腸プレイそのものは、夫とも経験していたし、私は便秘解消にもなるから、おそらく病みつきになっていたのでスムーズに端口を受け入れる。

私の腸はそれを感じてくねる。逆さに吊られたまま浣腸をされる……。

いつもなら端口が入ったあたりでポンプを握る。技

師はそれをもつと奥に入れてくる。固い先端が奥を目指して腸壁をたどっていく。

曲がりくねった腸の奥あたり、狭いところに突き刺さる。

そこで、技師はポンプを操作した。空気が送り込まれた。すると、膨らんだ腸が、さらに奥までゴム管を受け入れてしまう……。

私の口は、小型のデイルドが仕込まれた猿ぐつわでふさがれている。デイルドの先端は喉に達していて、それも私の肉体開発の役割があるという。男性の性器を喉で快楽にいざなうためだ。

「雨は天然の浣腸液だ」

技師は笑う。

マンションと私の家の間にあるブロック塀。その上部の有刺鉄線を支える鉄の柱に私の足首が縛り付けられていた。

マンションの駐輪場の屋根から樋を伝って落ちてくる雨水を、ズズツと音を立てて吸い込み、私の腸に注ぎ込む。

冷たい。

お腹にずつしりと冷水の塊が入る。吐きそうになる。

「どのぐらい、入れるんだ」

「さあ。気絶するぐらい入れたい」

技師が子どものように笑う。

醜いだけではなく、そのことだけしか考えられない
頭脳の持ち主。技師は私を徹底的に破壊したいのだろ
う。

男はそれを利用しながら、ある程度のところで止め
るつもりなのか。

こうして身を委ねてしまえば、殺されても文句は言
えない。いま頃気づいても遅い。

どれほどの時間が経ったのかわからない。お腹がパ
ンパンに膨らんでいる。吐き気がする。

雨はさらに激しさを増してきた。

エイナスからチューブが抜けて行く感覚は、まるで
腸を引きずり出されるようで、それにともなって大量

の雨水もあふれ出る。

「噴き出してみろ、噴水みたいに」

技師は私のお腹を手で押した。激しく腸内の液体が噴き出す。あれだけ冷たかった雨水が、体温で温まっていた。

温かくて気持ちがいい……。

「ほほう、けっこう高く上がるもんだな」

男は笑っている。

お尻から出た雨水は、私の体を濡らしていく。

「ビューツと、噴き上げてみる」

押されながら、私も力を入れて排泄をした。

技師が笑っている。

「もう一度だ」

再び浣腸器が入れられ、雨水をたつぷり注ぎ込まれる。そして噴水をさせられる……。

しばらくそんな芸をやらされてから、ようやく吊りから解放され、地面に投げ出された。

私はアスファルトに倒れ、なおも尻から雨水を垂れ流していた。

見本 試読 SAMPLE

誓約書にルージユで捺印するように言われた。

喫茶店のトイレで、私は自分の秘部にルージユを塗り、誓約書を押し当てていた。唇、恥丘、肛門。三つの印が赤く、紙を彩っていた。

男はそれを、喫茶店の中で堂々と広げて眺め、ほくそ笑んだ。

そして私の家に戻り、男は技師を呼び出した。技師は私を見て興奮した。それが私には怖かった。

鼻息が荒くなつて、牡の臭いを発散させる。

大きなバッグを二つ持ち込み、居間に置いた。金属

がぶつかるような重々しい響き。エアコンの修理にでも来たようだ。

「これは、なかなか上等そうじゃないですか」

「この家は安全だから、自由に使っていい」

私は二人に家の合い鍵を渡した。

そして全裸になり、跪き、頭を床につけて「よろしくお願いいたします。私の穴という穴を開発してください」と、お願いした。

彼らは、床の上で私を犯した。

男は女性器だけを。技師はエイナスだけを。

それが取り決めなのだろうか。男の性器は私がこれまで見たことのある数少ない中では、最大級の太さを

持っていた。技師はそれを上回り、長さも伴っていた。

「奥さん、あんたは名器と言われたことはあるか？」

男が言う。

「ありません」

「男を何人、知っているんだ」

「三人」

「そいつらは、あんたを放そうとしなかっただろう」

「ええ。そういえば」

「おっと、なかなかの締め付け具合だ」

男は苦勞しながら長引かせようとしていた。

「ケツ穴の経験も豊富か？」

「夫に……」

「S Mもか」

「はい。ほんの遊び程度です」

二人を同時に受け入れる苦痛の中で、早くもこんな目に自分を追い込んだ自分がバカだと思っていた。

盗撮されたのだ。警察へ届ければ終わったはずだ。

その気になれば引っ越しもできただろう。解決方法はいくらでもあった。

この人たちは犯罪者なのだ。

どんな映像が撮影されていたのかを確かめたわけではない。もしかしたら、ピンぼけで大したものも映っていないかもしれない。

それなのに。

彼らは二度、続けて私の中で果てた。

「朱肉で赤いまんこやケツ穴を掘り返されて、どんな気分ですか」

夫とも、ほかの過去の男とも、経験したことのない長いすぎるセックスだった。

その間に、私は何度も頂点までのぼりつめさせられた。数え切れないほどの悦楽は、苦痛を帳消しにしていた。

「答えられないんですか？　でも体は正直だ。どうせ返事もしないのなら、口も塞ぎましょう」

それから、雨の降る外に連れ出され、逆さに吊られ、雨水をお腹が破裂しそうになるまで浣腸された。

十二月の雨に濡れて、冷え切ったアスファルトを全身で感じた人など、そう多くはないだろう。

そこは人々が靴で歩くところ。雨で流されているとはいえ、素肌で触れるところではない。

雨に打たれて、お腹にたっぷり入れられた雨水が腸内で温められ、だらだらとあふれ、尻から腿へと伝っていく。

技師が私の首に、鋏のついた大型犬用の首輪をつけた。冗談でつけたのではなく、ギリギリまできつく締めた。

「歩け」

何時なのだろう。深夜である。このあたりは深夜に

歩く人はほとんどいない。

だが、幹線道路に出ればクルマは多いし、深夜までやっている店もある。

全裸で歩くのは、恐ろしいことだった。

私が夫としていたことは、密室での秘め事。二人だけの世界だった。

妄想としては、裸での散歩もないわけではなかった。そうした動画やAVを夫が見せてくれたこともある。いずれも若くきれいな女優たちが、恥ずかしげもなく日中の屋外で裸体を晒していた。

私にはそこまでやる自信はなく、夫も強要はしなかった。

「手をつけ。尻を上げろ」

男が指示をする。

尻に鋭い痛みが走る。

見ると、技師は片手に細い棒を持っていた。もう片手で首輪からのびたチェーンを巻き付けてしつかりと持ち、傘は畳んで肘にかけている。

私を叩いたのだ。

予告もなにもなく。

それは衝撃だった。

ヒュツと空を切り、それが尻に当たると、切り裂かれたような熱い痛みが走る。

喉に達しているデイルドを吐き出したいが、がっち

りとベルトで押さえつけられている。うめき声さえもほとんど漏れない。

あとで知ったが、ピアノ線に柔らかな革を巻き付けた特製の鞭だった。軽く、よくしなる。ちよつと当てるだけでも、皮膚を切り裂くような痛みを与えるのだ、と技師は自慢していた。

相手は夫ではない。男も技師も、私は名前を知らない。私がサインした書類には彼らの名は入っていないかった。

甘えが一切、許されない。私は絶望に震えた。そして痛み。

痛みは恥ずかしさを忘れさせる。自分が自分である

ことを思い知らせると同時に、とにかく命令通りにしなければいけない必死にさせる。

「ケツを上げろ」

手をついて、尻をあげる。逆さに吊られていたのも、頭に血がのぼっていたが、この姿勢でも頭は下がり、苦しい。しかも技師はチェーンをぐいぐいと引っ張る。

奇妙な獣の誕生だ。

尻を高く上げることが求められているので、あまり膝を曲げられない。

「いいか。おれたちが鞭を使うときは、おまえからケツを差し出すんだ。逃げるんじゃない。おまえが欲しがっているから、引っばたいやってるんだからな」

ビシツと尻に新たな痛みが加わる。

「お礼は？」

「うんぐぐぐぐ」

口の中いっぱいのでイルド。猿ぐつわのせいで喉を鳴らすだけだ。

技師の持参した私を責める道具が詰まったデイパツクをお腹に抱えるように負わされた。

「歩け」

いくつもの街灯の下を通る。暗闇に逃げることも許されない。明るくなると、きまつてひと鞭、当てられた。

「あぐつ」

「お礼は？」

「んぐぐぐうう」

せめて頭を下げて髪を振り乱してお礼をする。

その様子が撮影されているようだった。

「止まれ」

街灯の真下。そこは隣のマンションの玄関に近く、

このあたりでも明るい場所だった。

「もつとよく見せろ」

男が命じる。

技師は明かりのほうに私の尻を向けさせた。ストロボが連続して光り、何枚も写真を撮られる。

長い髪が顔を隠してくれているとは思うが……。

「うつ」

いきなり、エイナスに堅いものを感じた。

冷たく濡れている。

細いものが奥まで入ると、根元は複雑な形状らしく、凹凸を感じる。

そしてまた写真を撮られた。

「どうだ、ケツに傘を突っ込まれた感じは」

グリグリと尻に傘の石突きをねじ込んでくる。

「んんん」

浣腸は自分でしていたし、夫とのアナルセックスも頻繁にしていたが、これほど屈辱的な異物を挿入させられたのは初めてだった。

技師の巨大なペニスによる痛みはまだ残っていたし、雨水浣腸でさらに粘膜は鋭敏になっていた。

「歩け」

私のお尻にビニール傘が深く突き立てられ、男がそれを支えている。技師は私の尻や背中、腿を叩きながら鎖を引っ張る。

これほどまでに惨めな経験はなかった。

頭がボウツとなっていく。息が苦しく、首を半ば絞められたような状態だ。鼻だけで息をし、やがて突然、快感が下半身から膨れ上がり、私はなにも見えなくなつた。

気絶したようだ。

気がつく、まだアスファルトの上だった。雨は上がっている。冷たい風が吹き、濡れた体をガタガタと震わせていた。

「だらしがないな、この程度で」
なにも変わっていないかった。

喉の奥までデイルドが突っ込まれ、首輪をされ、お尻に傘が刺さっていた。それも、いつの間にか恐ろしいほど深く突き刺さっていた。

「起きろ」

技師はズボンのファスナーをおろし、私の顔をめがけて放尿した。

「うぐううう」

温かい小水が目、鼻、耳に、流れ込む。顔を左
右に振って逃れようとしても、追ってくる。

首輪を引っ張られ、お尻を突かれ、アスファルトの
上で身もだえする牝犬。

髪から顔から、尿をたっぷり浴びせられてから、よ
うやく私は体を起こすことができた。

「歩け」

果てしない道のようにだった。

私は苦しい姿勢で歩かされた。いつしか全裸である
ことを、受け入れるようになっていた。

見本 試読 SAMPLE

広い公園に出た。

そこは昼間なら、子ども連れの主婦たちや、若いカップルなどがそぞろに歩く場所。子どもの頃より広く、きれいに整備されている。

濡れた落ち葉を素足と素手で感じて、お尻を傘でえぐられ、体中を叩かれながら歩かされている。

乳房がたぽんたぽんと揺れる。

入り口から入ってすぐの広場で、私はようやく立つことを許された。

体に赤い筋がついている。脇腹の長い筋は、汚れて

奥付

お読みいただきありがとうございました。

二〇一二年九月刊行 二〇一九年八月二版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。